



布施だより

《 人権を考える日～命を慈しむ日～ 》

いつく



4月25日(金)は篠ノ井西中学校にとって大切な「人権を考える日」でした。2時間目に生徒会主催の「人権集会」が西体育館で行われました。最初に学校長から「人権を考える日」に寄せての講話がありました。

～ ～ ～ ～ ～

今から27年前の4月22日、当時、本校の2年生だった上原夕子さんが、「この世の中にいじめがなくなりますように」という言葉を遺書に残し、自ら命を断ちました。

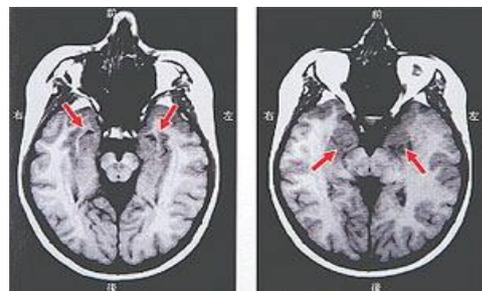
今日の「人権を考える日」は、この過去のつらく悲しい出来事から、命の大切さや人権を守ることの大切さを学び、今を生きる私たちが二度とこうした出来事が起こさないよう、いじめを絶対に許さない決意を新たにす、そして、誰もが良さを認められ、居場所がある学級、学年、学校づくりをしていくために、自分や自分の周りを見つめ直し、今自分は、具体的にどう行動すべきか考える日です。まず、最初にこのことを心に刻んでください。

今日は、皆さんに「いじめの罪深さ」を、単なる言葉としてだけでなく、心から感じとってほしいと思い、お話しをします。

「いじめは脳を傷つける。だから、いじめは犯罪行為・傷害罪なんです。」

これは、東北大学の松沢大樹先生の言葉です。松沢先生は、実際に、大勢の生きている人の脳を見てきた脳科学の先生です。松沢先生は「深刻ないじめによって、脳の扁桃核という部分に傷が生じる」と言っています。傷というのは、例えではなく、本当の傷のことです。

この写真を見てください。黒く小さな穴のように見える部分があります。これが深刻ないじめによって、受けた脳の傷だ



というのです。

深刻ないじめが原因で心の不調を訴えて松沢先生のところに来た子どもたちには、すべて、こうした傷がついていたそうです。その数は3年間で100人以上にもなったそうです。

「深刻ないじめは脳を傷つける」ということ、「恐ろしさ」を考えてみたいと思います。脳は、気持ちや感情、身体の調子をコントロールする機能をもっています。それが傷つけられると人はどうなるのか。松沢先生は、扁桃核が傷つけられると、心や身体のあらゆることに影響を与えていると言っています。心の病気になってしまうこともあります。

例えば、夜眠れなくなる。ご飯が食べられなくなる。頭痛がする。お腹が痛くなる。学校に行くのが怖くなる。人に会うことができなくなる。常に気持ちが沈んだままで、何もできなくなる。さらに深刻になると、生きること自体が嫌になる。他にも様々なことが考えられますが、心も身体も正常な状態ではなくなるということです。

さらにこのことの恐ろしさは、どんな人でも、深刻ないじめを受けると、脳が傷つけられるということです。心が強い人は大丈夫とか、そういうことではありません。ナイフで刺されれば、どんな人でも身体に傷を負うのと同じです。

「わたしのいもうと」という絵本があります。これは実話に基づいて、童話作家の松谷みよ子さんが書いたお話です。知っている人もいると思います。

私がこの絵本に出会ったのは、もうずい分前のことです。その後、松沢先生の「いじめは脳を傷つける」という話を知り、私はこの「わたしのいもうと」に出てくる女の子と、松沢先生の話をつ結びつけて考えるようになりました。

深刻ないじめを受けた女の子の話です。図書館の伊藤先生に朗読していただきます。聞いて下さい。



この子はわたしの妹。向こうをむいたまま振り向いてくれないのです。妹の話、聞いてください。今から7年前、私たちはこの町に引っ越してきました。トラックに乗せてもらって、ふざけたりはしゃいだり、アイスクャンディーをなめたりしながら。妹は小学校4年生でした。けれど、転校した学校で、あの恐ろしいいじめが始まりました。言葉がおかしいと笑われ、跳び箱ができないといじめられ、クラスの恥さらしとののしられ、臭いぶたと言われ、——ちっともきたない子じゃないのに、妹が給食を配ると受け取ってくれないというのです・・・。とうとう誰ひとり口をきいてくれなくなりました。ひと月たち、ふた月たち、遠足に行ったときも、妹はひとりぼっちでした。やがて妹は学校へ行かなくなりました。ご飯も食べず、口もきかず。妹は黙ってどこかを見つめ、お医者さんの手も振り払うのです。でもその時、妹の体につねられたあざが沢山あるのが分かったのです。妹はやせおとろえ、このままでは命がもたないと言われました。母さんが、必死で固く結んだ唇にスープを流し込み、抱きしめて、抱きしめて、一緒に眠り、子守歌を唄って、ようやく妹は命をとり止めました。そして毎日がゆっくりと流れ、いじめた子たちは中学生になって、セーラー服で通います。ふざけっこしながら、カバンを振り回しながら。でも妹は、ずうっと部屋に閉じこもって本も読みません。音楽も聴

きません。黙ってどこかを見ているのです。振り向いてもくれないのです。
そしてまた年月がたち、妹をいじめた子たちは高校生。窓の外を通っていきます。笑いながらおしゃべりしながら……。この頃、妹は折り紙を折るようになりました。赤い鶴、青い鶴、白い鶴。鶴にうずまって、でもやっぱり、振り向いてはくれないのです。口もきいてくれないのです。母さんは泣きながら隣の部屋で鶴を折ります。鶴を折っていると、あの子の心が分かるような気がするの……。

ああ、私の家は鶴の家。私は野原を歩きます。草原に座ると、いつの間にか私も鶴を折っているのです。

ある日、妹はひっそりと死にました。鶴を手のひらにすくって花と一緒にいれました。

妹の話は、これだけです。

(わたしをいじめたひとたちは もうわたしを わすれてしまったでしょうね
あそびたかったのに べんきょうしたかったのに)

私は、この話に出てくる女の子は、深刻ないじめによって脳を傷つけられた子どもだと思いました。

私たちは、いじめは人の心を傷つけるとよく言います。その通りです。しかし、いじめは、それだけにとどまらず、脳を傷つけ、そして、いじめを受けた人の、明るく楽しく過ごせるべき学校生活を奪い、夢を奪い、希望を奪い、その後の人生を奪い、命まで奪ってしまいます。

平気でナイフを振り回し、何のためらいもなく人を傷つけることのできる人は、普通いません。それは、ナイフで傷つけられる痛みをわかっているからです。さらに、そのことがまねく、結果の恐ろしさがわかっているからです。

いじめはナイフで傷つけるより、はるかに恐ろしい結果をまねくことがあります。いじめがまねく結果の恐ろしさ、罪深さを、心から感じてほしいそう思ってお話をしました。

最後に、今、みなさんの周りにいじめはありませんか？ そのいじめを、見て見ぬふりをしていませんか？ あなたは、人をいじめていませんか？ あなたは今、何をすべきですか？

～ ～ ～ ～ ～

この後、生徒会長の齋藤柊くんが全校を代表して思いを伝えてくれました。「いじめをなくすのは簡単なことではありません。全校の皆さん、ひとりひとりが意識し、行動に移していきましょう。自分が人をいじめないのはもちろんのこと、いじめをしている人がいたら積極的に止める、嫌な思いをしている人がいたら助ける、相談に乗る。とても小さなことですが、続けていけばきっと西中からいじめはなくなると思います。」



この投げかけを受けて、生徒諸君は「人権」について「命」についてメッセージカードを書き入れます。紹介します。

- ・みんなと仲良くしたいです。困っている人がいたら自分から話しかけ、ひとりぼっちでいさせないように心がけます。
- ・悩んでいる人がいたら、助けたり相談に乗ったりして、みんなが楽しく生活できるように自分にできることをしたいです。
- ・ One for all-All for one
- ・ 普段何気なく言っている言葉が相手を傷つけているかもしれない。言葉は人を傷つけてしまうものでもあるので、「言葉」というものに気をつけたいです。

生徒達は、それぞれのメッセージカードを教室に持ち帰り、3時間目には学級ごとに人権学習に取り組みました。1年生は「温かい心の交流を求めて」の資料で、2年生は「悲しみを秘めて」の資料で、3年生は「私たちの誓いと誇り」を資料に、決して忘れてはならない27年前のできごとから、自身の心のありようと言動を振り返る大切な時間になりました。

またクラスごとに学級人権宣言が話し合われもしました。「いじめや人を傷つける行為を見て見ぬふりをせず、ノックアウトできるクラスになろう！」など、ひとりひとりの思いが寄せられた人権宣言でした。

昼食を挟んで、午後は保護者の方も参観する中、中庭ミニコンサートが行われました。ハナミズキ咲く中庭から、2年生諸君は「君に会えて」を、3年生諸君は「空も飛べるはず」を合唱し、最後に「生徒会歌」を全校生徒で、心一つにして届けました。



大切な、大切な、「人権を考える日」の様子をお伝えしました。

～ ～ ～ ～ ～

当たり前の毎日の生活が、様々な種類の活動に支えられていることに気づくことがあります。学校生活の中でも、多くの活動や心遣いに支えられています。

毎朝、生徒玄関を清掃してくれている諸君がいます。また職員室前の廊下を床磨きしてくれている生徒がいます。聞けば、委員会のボランティア清掃であったり、自主的に掃除してくれているのだとか。また北校舎へ行く小黒板には、その日の朝刊から時事的な記事をコンパクトに要約し、書き入れてくれている生徒がいます。TPPの問題であったり、オバマ大統領訪日の話題であったり。社会に目を向けるきっかけとなっています。また毎朝の校内放送は、その日にまつわるエピソードから一日がスタートします。「今日はアースディです。地球の環境を守るため、ひとりひとりが協力しましょう。」といった具合に。

ひとつの集団や組織が当たり前のように過ぎていく上で、ひとりひとりの活動がかけがえのないものだということを改めて感じます。毎日を支えてくれている様々な場所での、何気ない縁の下の力持ちが、西中の学校生活を潤いのある豊かなものにしてきてくれています。